

素人製陶本窯を築くべからず

——製陶上についてかつて前山久吉さんを激怒せしめた私のあやまち——

北大路魯山人

青空文庫

(一)

私は日頃の心がけとして、後悔になるようなことは決してせんつもりでいるが、事實は、どうしてどうして大いに後悔することが次から次へ湧いて出て当惑することが少なくない。

例えば先年前山久吉さんを激怒せしめたなどはその例のゆゆしき一つである。それが場所もあるうに三越の四階、私の作陶展覧会場である。従つて多勢の人ごみの中でだ。相手は耳順、私は知天命に近からんとする者、この二人が勢いづいてついに馬鹿野郎を相互連発したのだから私として後悔せざらんとしてもしない

わけにはゆかない。

事の起こりは製陶上の問題であつて、見解の相違からなのだつた。

当時前山さんが鎌倉の自邸に製陶窯を築かんとされたとき、私が余計なおせっかきをいってやったものだ。実をいうと大した懇意でもないくせに、窯を築くのはおよしなさい、自作するならばのこと、指図で職工に作らすようでは所詮なにも出来るものではない。仮に自作するにしても……ずぶの素人が片手間に轆轤ろくろを廻まわしたくらいでは三年経つたつて猫の飯食う茶碗も出来るものじゃない……云々てな、嫌な文句で手紙を送つたものだ。

これにはさすがの前山さんもちよつと思慮を欠かれて真つ赤に

なつて怒つたらしく、魯自身はとうに陶窯を築き、楽しみもし研究も続けながら、俺が窯を築きかけるといけないという。なんという失敬なことだ。実にけしからん。手前勝手な奴だ。……

考えてみると私も、いい方だつてあつたらうに猫の飯食う茶碗だつて出来るものかなどと、大袈裟おおげさに過言したものだから、たまらなかつた。なにを……という拳げんこつ骨が振り上がったのは、あえて今から考えなくても無理のない話である。それも私が純真にいったのならまだしもだが、多少含むところもあつて意識的に彼を刺激したのだから、なんといつたつて私は人が悪い。魯山人はあくが強いなどとよくいわれるのはこのところだなとつくづく考えたのであつた。

しかし、私に余計なからかい気分の邪魔があつたに違いないとしても、私が忠告の真意は誠実であつて、私は心から、鑑賞家として聞こえある前山さんに築窯と製陶を止めさせたかつたのである。これには今もつて毛頭の偽りもなければ寸毫すんごうのからかい気分もない。

なぜかといえ、いうまでもなく前山さんに轆轤を廻すつもりがないことも、廻せる可能の有無も私には分りきつていたからである。

自分が造らなければ誰が造る。いわずと知れた職人が造るまでではないか。それでは前山久吉翁作ではなくて、久吉翁指図、職人某々作とならざるを得ない。これをお庭焼といつてもよいが、

職工がたった一人のさびしいお庭焼は取るにも足らんではないか、さらでだにお庭焼と称する物にさしたる名品が生まれていないことは前山さんとてとくと御存じである。これが私の忠言となつて彼にとつては不服な刺激をもつて迫ることになつたゆえんだ。

翁にいわすれば……否、現に前山さんが私に三越楼上で放言した一節を紹介すると……君遠州だつていちいち自分で茶ちやしやく杓しやくを

削りやしないよ。皆職人に作らしたものだ。指導だ……指導だ……指図次第で出来るよ。この一言で私の陶製観をやつつけ得られるつもりらしく平気で怒号されたのだが、なにがなんとしても前山さんの芸術無理解の実体が人前にさらけ出されるまでで、一向に私をやつつける痛棒にはならなかつた。しかも笑止に終わって

しまわざるを得なかつた。ここで私の卑見を披瀝すると、

一、前山さんの第一の錯覚は一代の小堀遠州宗甫と御自分を同等に扱われたこと。

一、職人は職人でも遠州時代の職人と今日この頃、しかもそこばくのことでもいいなりになってくれる職人とはその質が違
う、腕が違う、心が違ふという点に不注意であつたこと。

そしてその前山さんが陶製上の予備知識を絶無とはいわれないが殆どというも過言ではないほど斯道知識しどうをもたれなかつたこと。

これらが私をして前山さんに製陶計画抑止の勧告を余儀なくせしめたゆえんなのであつた。

これだけでは、不遜魯山人ふそん、未だに人を馬鹿にしよると翁をし

てまたしても激怒さすことになるやも知れないが、私は行き届かないながらも、これより順々徐々……「素人製陶本窯を築くべからず」の理由を具体的に出来得るかぎり読者、否、翁が心の底から得心されるべく述べたてて翁の廃窯に未練なからしめんと考えているのである。それには御迷惑でも住友寛一氏の製陶失敗例も出ようし、頼母たのもぎ木桂吉氏の九谷窯？ の話も自然出さないわけにはいかないであろう。が止むを得ざるかわり合いとしてお許しを願いたい。蓋しけだ故意に悪口を弄ろうするわけでないことはもちろんである。この点、なにかの御参考にならないものでもないとして、しばらく御判読を希望して止まない。

(二)

なぜ素人は窯を築いてはいけないのか、……これが答えはいうまでもなく、それは所詮出来ない相談であるからだ、私はいつもの憎まれ口をききたいのである。とはいってもその人の、望みの大きさ次第では一概にいつて退けたものでもないが、少なくとも前山翁のような好者であつてはその望むところの最後のものが大きいとしなければならぬから、要は出来ない相談だといわざるを得ないのである。伊賀に手をつけた某氏にしても住友、岩崎なんという富者にしても、頼母木氏のような好みの人々にしても所詮は出来ない相談である。これらはいずれもが、漫然出来得る

と軽率にも誤認し、それを空しく求められているだけだと、私の常識と経験はいつでも断言を吝まないものである。

これについて私は余計なことをと、他の誹りあることをよく知りながら、ぜひともこの問題を解剖し解決しようためにその仔細を開陳したのである。それについて引例を便宜上前山さんにとすることは、先の失敗もあることゆえ私はよほど考えたのであるが、かつて素人窯を築いた如上の人々の中で現在なおかつ、窯事の研究に没頭していられるのは前山久吉翁一人であるからいわば人身御供に上らされたわけである。あえて翁を相手に戦うのでないことだけは翁においても諒承されたい。

住友さんについてはどんな望みをもつて製陶に臨まれたか、私

はよく知悉ちしつしない……が、氏は篆刻を鉄城に学んでみ、あるいは富岡鉄斎翁の画を臨写してみずから発表するなど一方ならぬ趣味人であり、かつまた清湘老人の画に巨金を投じて複製を世に配した位の好者でありする点から見て、その望まれる陶磁器もそのネライが奈辺なへんいかなるところにあるかは察するに難くないが、いずれにしても氏は財閥住友の御曹子であつて浮世のせち辛さを知らないわゆるお坊ちゃんと見るべき人である。それがためか否かは別としても、ともかく、京都からIという陶家を鎌倉に招き御大層な窯を築き、宿志なれりと考えられたのである。しかし、その束つかの間は実に数旬を出なかつた。ついに持ち前の癩かんしゃく癩玉を破裂さし、失意の人となられたのは私から見て当然すぎるほど当

然ではあるが、誠にお気の毒な瞬間を作られたものである。

住友氏からして岩崎、前山、伊賀、頼母木の諸氏などからして、自邸に陶製し楽しまん^と決意せられたまでの趣味性は私も覚えがあるが、まったく大した奮発の挙句なのである。

しかるにかかわらずいずれもたちまち一場の夢と化しおわつて無念にも しようぜん 悄然^{しようぜん} たらざるを得ないのはなんとしたことであろう。

それはなにもかもがいかにも軽率な判断に過ぎなかつたからとするの他はないのである。これはいずれもの人々が陶器師なる者さへ手許に連れ寄すること、よつて思うまま欲するままに陶磁が窯出し得るものと、こともなげにも予断する軽々しくせのある一事である。伊賀を作らんと欲して窯を築く人が伊賀信^{しがらき}樂にはあ

まりにも縁の遠い、横浜のMという陶家に依頼して古伊賀の再現を期待するなど、私の口を率直に割るならば浅慮きわまるというの他はない。

前山翁が最初仁清ふうを作らんとされた時も、京都のKという陶家をひっぱってきて、これに望みの夢をかけられたらしいのである。美校の画学生を聘^へして仁清ふうの絵付けをさせてみたりされるあたりは聡明そのもののような、前山翁の所作としては合点のいかな過ぎる常識なのだ。しかも、その期待に破れた後は瀬戸系陶器に心移して志野、黄瀬戸、織部といった、しぶ好みなるものの成就を欲し、一挙気構えをそれに傾倒されたようである。が、惜しいことにこれとて深い用意および周到綿密な調査の行き

届くものがあつての企図ではなかつた。最初仁清に理解なき陶家を連れ来^{きた}つて、仁清を作らんとした誤つた行為から一步も前進のない進みをもつて瀬戸系試作に臨まれたのであつた。このこと、私の見聞に誤りなしとするならば、こととしだいもあろうに一種の札付で有名なAという名古屋出の道具屋に瀬戸陶工の身軽者を世話せよと迫られたことである。そこで最初を選び出されたBなる陶人は小さな奉公は出来ない^と諾するところがなかつたが、次のKなる陶人は身も心も軽く前山邸に轆轤を運んだ。それからというもの、この陶人と前山翁の角力^{すもう}は勝負ありともまたなしともつかず、兩人相對していろいろ複雑な辛抱の日が相互今につづいているあり様だ。

うるさいことをスツパ抜く奴と思われることを必定として、こ
こにもう一ぺん念のため語らざるを得ないのはなんとしても翁の
驚くべき勘違いである。なるほど、前山さんは茶道に縁あつて以
来というもの中国陶磁に朝鮮陶器に日本もの、ありとあらゆる
名器を幾度となく、繰り返して玩味がんみせられたであろう。しかして
われわれいわゆる素人が製陶に手を出した場面を目前に見られて
はヨシ俺もという気になつて事業家として成功せし自信を……聡
明を……製陶の上にも盛り切れるものとして、扼腕やくわんし、たちま
ちのうち志野も黄瀬戸もたちどころに再生させてみると心はい
ら立てられたに違いない。

聡明そのもののような趣味人たる諸氏がなぜかくも揃つて軽拳

されるのであろう。そうして不甲斐なくも悉く失敗の跡を遺して苦笑されるのはなんであらう。いやしくも男子一度志を立てた仕事である以上そうやすやすと瞬時の中に、事、志と違ふようでは遺憾ではないか。諸氏はなにが故にかくも揃つて苦い経験を作陶の上に舐められるのであろう。

私にいわしむるならば、それは別段とくに不思議な因縁があつたわけではない。思いもよらざる事柄が飛び出して挫折したわけでもないのだ。つまりは諸氏の望みと諸氏の用意との間に齟齬があつたのである。諸氏はいよいよ作陶に取りかかるといふその日までにとれだけの用意があつたであらう。作陶上に必要な教養をなにほど修めておいたか、またどれくらいの作陶経験を有してい

たか、私は率直にいつてみるが「諸氏はおそらくなんの用意もま
ったくなかったのではないか」と、この点については諸氏の固有
する才能そのものが自己を打つところの、持った棒となりおわつ
たのではないか。

焼物師には出来ないが俺が俺の家で指導したら、工夫したら、
聡明な考え方をもつてしたら、染付、赤絵、九谷、瀬戸、唐津、
朝鮮、中国、なにほどのことやあらん。俺だ……俺だ……俺の頭
だ、俺の知識だ、俺は鬼だ、金棒さえ振りやなんだって出来得な
いことがあるか、金棒というのは焼物師のことだ、焼物師、俺に
つけ……こんなふうに諸氏は方法で物が生まれると早計に考えら
れたのである。なるほど、現在の五条坂や帝展物はある程度の方

法によつて出来得ることは私とて保証の一人に立つ者であるが、もともと諸氏が希望するような芸術的作品は……名陶は……さよ
うゆるがせない方法のみでは出来ないものであることを断言したい。
試みに考えてみるるがよい。陶器なるが故に聡明な諸氏もわか
うかしていられるが、これを画に移して、ある方法のもとに名画
が生まれ出づるかを考えられたい。愚にもつかぬ画家を雇^{こへい}聘し来
つて、その者から名画を生ましめることが方法によつて出来得る
か出来得ないかを考えられたい。

察するに諸氏はその昔宗和が仁清を造つたなどという俗説をう
かうか信じ、宗和再生を夢見られたかも知れない……が、宗和は
生まれていなくとも仁清は立派に仁清であつたと私は断言する。

宗和によつてボンクラな仁清が一大天才に変わったと解する者があつたとしたら、それは度すべからざる痴漢だと私はいう。況や宗和でなき者の力が、況や仁清に比すべき天才を見出さざる者が、千の辛も万の苦も経験せず、問疑答離の経験もなく万巻の書もとよりはんえつ繙閱せず、しかもただちに彼岸に達せんとするがごときは慨歎に値するとされても仕方あるまい。

(三)

素人が窯を造る場合、その目的が大量製産の利潤にあるか、少量優品製作にあるかはあえてわざわざ問うまでもあるまい。しか

らば少量の優品を作り出して優雅逸楽に耽^{ふけ}らんとするには、その作品は誰が作るのかに問題の重点をおき、これが注意的とならざるを得ないではないか。そこにはとくに優れたる作者の存在がなきかぎり優れたるものが生まれ出でようはずがない、かくて作者は誰かと考えざるを得ないのである。

これを住友氏の場合に照合するとき京都のI氏監督、それに属する無名の工人二、三となる。また前山氏の実例をもつてすると最初が京都系、次が瀬戸系工人、それがいつも一人か二人である。次の頼母木氏の場合は少しく事情複雑であつて、坊間伝うるところによると、これは必ずしも頼母木氏一建立の御道楽になつたものにあらず、加賀山^{やましろ}代温泉場のいわゆる、九谷窯の某氏（職商

いをなす人)との妥協になるいわば一挙両得を考慮した築窯である。しかししてこれとてなんら特別な工人をもつて当たるところではない。

かような事情になる諸家の素人窯から優秀なる名陶が生まれ出でようはずのないことは別段ここに氷炭冷熱をいわずともみずから明らかではないか。それはいうまでもなく当たるに足るしかるべき作家を各自が有さないからである。名作はいかような場合にも天から雨のように降るものではない。誰かが製作するところのものである。ここにおいて作家なくして名品の製出を夢見る各家はいかなる常識をもつて起案し、いかなる算用をもつて結果を望んでいられるか私は実にこればかりはただただ不思議に堪えない

で困っている。

私は先にもいったことであるが、おそらく各家は自己の指導力によつて往古に見るがごとき名作を成し得られると大雑把に考えられたことと察せざるを得ないが、もし果たしてしかりとするならば、これを画の製作に考えを移して、各自の指導力が雲舟、牧谿でなくても三樂を生むかもとのぶ元信を生むか桃山芸術を生むかを反省されたい。私は優れたる芸術、優れたる美術は小さな一人の指導力で生まれるものではないことを断言する。況や個性ある芸術をや。

前山翁はまったく罪のないことをいう人で、窯の仕事などというものは自己の経験からいうとき、一代二代の研究で出来るもの

ではないと、まるで科学の発明でもあるかのように譬えて、自窯の不成功を闇あんに仄ほのめかされたが、これはテレ隠しというものであろうではないか。

翁は志野うわぐすりの釉が意のごとくゆかない、志野の火色が出ない、黄瀬戸が思うように発色しない。これが成功を見るまでに進めることは一代や二代の研究でゆくものではないと考えられたに違いないと察せられるが、翁が一人や二人の工人を相手あいてに、僅々きんきん二年三年の片手間にも足らざる研究でこれを率直に発言させるのは、あまりにも罪がなすすぎるのではないか。

況や、名人に二代なしは昔から伝うるところである。光悦の後に光悦なくのんこうの後にのんこうはない。のんこうの先にもの

んこうはない。仁清の先にも仁清なく、仁清の後にも仁清はない。翁が苦心？ の志野もまた志野以前に志野はないのである。初期志野時代以後にも志野はないのである。前山氏が僅々二、三年の経験をもつて、その不如意を弁ずるに当たつて一代二代の研究のよくするところでないなどと公言されるのは、私はあまりにも罪がなさ過ぎるとするものである。実業家としての前山翁は一部に俊敏の聞こえ高い名士であるがごと、窯業芸術となつてははなはだ解し難い腕前を有する人といわざるを得ない。

しかも、ものは分つたから出来るとはかぎらない。否分つたから出て出来るものではないのである。分るということと出来るということは別問題であるといつてもよいくらいのものである。

如上の各家が勘違いをされたのは、とりもなおさずこの一点に存すると考えられないことはないのである。譬えるまでもなく、仮に墨跡が分る具眼者であるとしても自己に能書ありとはかぎらない。牧谿が分る、梁楷りようかいに合点がゆくとしても自己に描けるものではない。

前山翁の場合のように自己が仁清に理解あるつもりだからとて、ただ単に工人を自家に呼んだだけで仁清が再現するものではない。自己そのものの天分が仁清と同じであつて、しかして自己がみずから製作せざるかぎり仁清は再び生まれ出づるものではないのである。況や製陶上の概念知識さえも有しないズブの素人に雇傭こようされる工人、一美校生などの日給から仁清は生まれ出づるわけのも

のではないのである。さるにもかかわらず、自己の一挙手一投足に成功を簡単に夢見るごときは、実に傍若無人の暴案といわざるを得ないではないか。私は何遍でも繰り返すが、優れたる芸術は他人の工夫や立案で成就し成功するものではないのである。

価値ある芸術とは優れた天分ある人格者の識見からと、その練熟の腕前とから生ずるものであるのである。すなわち優れたる作者あつての優れた作品である。決してあかの他人のおせっかいや小さな権力から生まれ出づるものではないことを得心して欲しい。ここにおいてあかの他人に当たる各家は製作上の真理に領^{うなず}いて貰^{いだ}いたのである。すでに廃窯された諸家はその苦い経験からして今日では私同様の感を懐^{いだ}かれていることと存ぜざるを得ないが、

現在なおかつ現窯を持続せられている前山久吉翁にはなんとしても目的成就の不可能なる理由を悟つていただきたい。それは翁をして単一的鑑賞家、あるいは優れたる好者として完全に生かしておきたいからである。彼が好者としての金箔きんぱくをなまかな製陶の不成功によつて醜く剥がしたくないからである。翁はその骨董の買入について商人中もつとも物議の多い評判の人ではあるが、とにもかくにも好者は好者であり、かつもつとも優れた好者の一人である。翁がいかにもその買方に道具屋の言のごとく紳士的であるとしてもないとしても、かなりに目のよく利く好者であることは、私の睹みる目をもつてしても間違ひは無ないつもりである。

この一事をもつて考えるところも、翁たる者進んで廢窯の道を

採るの拳がいかにも賢明であり、いかに人物を大きくすることか分らない。人間は我もある程度に必要である……が、土俵割るも未だ負けを承服しないという田舎角力であつてはならない。勝ちも勝ち、負けは負けと水の流れるごとく素直でなくてはよくあるまい。勝ち必ずしも名誉とはかぎらない。負け必ずしも不面目とはかぎらない。や、これはこれは失礼、うかうか、釈迦に説法……脱線の儀は平に平に謝し奉る。

(四)

またしても前山久吉翁の製陶遊戯を引例して恐縮に堪えないと

思っている。これはことによると、誤解の生ずる^こ惟れなしと保険はつけられない程度に危険があつて、自分も懸念しないわけではないが、現在、窯をもつて理想的に名陶を作り出さんとし、もつぱらその成功を望んでいられる関係上、自然と風向きがその方におもむ^{おもむ}趣くのはまことに止むを得ないことである。これが前山翁であるがための引例でないことはもとよりいうまでもない。この点は翁みずからも充分了解していただけるものと信じ、しばらく素人本窯築くべからずの参考資料に上つていただく。

さて、前山翁最初の製陶目的は彼の^か偉材仁清であつたらしい。まず仁清ふうを工人に轆轤させてと考えられ、次に絵付けとなる、

と考えるにも考えられたもので美校生を招かれたという。このことはよく美校の校長に擬せられ、とかくの話題に上る某日本画教授の口から私が聞いた話である。

私はこれを知って翁のために同情もすれば、苦笑もした。翁は仁清という大天才をなんと解していられるのかは知らないのだが、仁清ほどの特異な実在を再び造り出さんと自負する大望の翁が、一美校生を招きそれに仁清ふうの絵付けを託し、もって目的を達せんとせられたのはなんとしても認識を具えた所業そなと受け取ることは出来なかった。みずから翁らにしてみれば今の陶画工では清水坂以上の仁清は描き得べくもない。

それには美校の生徒をもつてすれば、職工と違い指導次第では

理解も出来、卑しからざる絵が出来よう、本歌を見せて語れば成
功疑いなし、と……こう考えられ自分ながら妙案明知が創見され
たごとくホクソ笑まれたらしい。果たしてそうであるならば私ら
の見るところとして、この場合の翁の処置妙案？ は申しようも
ない、恐ろしい矛盾と錯覚からなる、非常識な創見を發揮したも
のとみなさざるを得ない。

いやしくも日本陶芸史上ゆゆしき陶芸作家として日本の誇りと
し日本の国宝とする仁清は、憚り多いことをいうようだが、翁の
ように今の今まで陶磁製作上無関心者であつて、その気まぐれ、
ちよつとしたはずみの出来心から名工仁清が浮かび出ようはずの
ないことは火を見るより明らかであるとせねばならぬ。況やたか

が美校学生の画力で彼の仁清を再現しようなどとは思ってもよらぬ妄想である。

仁清というものそんなにたやすいものであるならば、さほどあり難いものではないという結論が当然と生まれはしないだろうか。それならば、わざわざそれが再現を期すべく努力を払う行為はこれまた矛盾の誹りを免がれないであろう。

僭越ながら私の経験から語れば、今日現存の轆轤工に仁清を解するものがないこと、工作する者のなきことは誰に憚るところもなく断言し得られる。絵付けにおいてもまたそれと同じ意味を繰り返し決して不可ないと考えられるのである。一美校の学生はもとより、これが教授であろうが、他の大家達であろうが、それらの

人たちの筆からは、仁清が生まれようはずのないことはあまりにも保証される。それはすべての現代新画が、如実に内容貧弱を物語っていることと分る。このうち、強いて適者？ として拔擢ばってき

するならばゆきひこ 靱彦、古径両氏の筆技と人品であろう。またしても

しばしば余談にわたることを謝すが、遠慮なくいうならば今の画人の絵というものはいわば体裁よき表面があるのみであつて、芸術上必須の条件となるべきよき内容を有するものは見当たらない現状である。例えば、それは生花、插花の美しさである。一見

「根」あるものと区別を分たざる美しさを示してはいるが、もとより「根」あるものはないから、いかに美しくも実を結ぶべくもないと同様である。仁清は日本に純日本ふう彩色の製作陶未だ生

まれざる今から約三百年前において初めて製作成功を収め、他方
いずれもが朝鮮、中国の著しい影響を蒙らざるものなき当時にあ
つて、にわかには彼一人がぜんぜん朝鮮、中国の存在を夢にも知ら
ざるものごとく、純日本単味の製作陶を創作し得たという偉材
であつた。その絵、その轆轤、その凶案、ただただ仁清という一
大芸術的特色、一大創作的の識見を表現するのみにして、今日こ
れを国宝に選びつつあるは決して偶然ではない。そこで、この偉
大な仁清の作品に着眼し、これが再現を期すべく発奮した翁の愛
美心と勇猛心と時流を厭きたらずとする努力には、さすが前山翁
であると、私もその企図的精神に感歎し、賞賛措く能わざる一
人ではあるが、ただし惜しむらくは、これが実現上、識者に図る

ところなく、熟考を軽率にして、不用意にも独断をもって、ひそかに京師の陶工一、二を拉致^{らち}し、必然的に成就を夢のごとく見、かつ画学生の力をもって仁清の深遠なる絢爛をやすやすと生み出し、多くの好事家、鑑賞家、愛陶家をしてアツと讚^{さんたん}歎^なせしめんものと、潜行的野望を懷かれた窯であつたことは千慮の一失ともいふべきで、このところ永い過去の生活に世の辛苦を嘗^なめ尽くし、思いのままに今日の成功を見られたと見るべき前山久吉翁の所業としては、はなはだ合点がゆかな過ぎる結果を生み残念であつた。しかし、さすがのがんばり翁もその自家窯何回かの失敗に教えらるるところあり、最初の空想は事実上不首尾におわつたことを自覚し、これが幻滅を感じられたらしく、仁清再現の企図だけは計

画いくばくもなくして放擲ほうてきせられた……を人から聞き知った。

この時……この際、翁にして製陶事容易にあらずとし、些細ささいな感情と世間に対する意地いぢづくなどにこだわるところなく、すなおにすべての製陶を断念して決然廃窯され、大きな世界の指導者になつていられるならば、翁の聡明と男性は災いを転じ、よき意味に印象づけられたのであろうが、惜しいことに再び舞台装置を変え、芸題を代え、看板を塗りかえ、再興行に移られたことである。これがまた失敗であつた。これまたよき引つ込みのチャンスを逸して遺憾であつた。実をいうとこの再興行に際しても、吾人ごじんは翁のために同情を繰り返し同時に苦笑を噛み殺したのである。

さるにしても、今後はまた、さらに登る一層の楼なる見識をも

つて……製作年代をさかのぼり当今流行の黄瀬戸、志野の再製作を計画し、しかして一瀬戸の工人を聘されるに至った。

前山さんは元来物語を単純に考える人と見え、この際も瀬戸陶工わずかに一人の力でもって、古来著名なる志野、黄瀬戸、織部時代とされている芸術的古陶を、無分別にも一挙生み出さんと夢見られたらしい。私は約二年ほど前益田鈍翁どんのうに面したときの直話であるが、鈍翁の言葉に、

「君、前山が来て近い中にきつと志野を焼いて持って来るつて大気焰きえんだったよ……」

私はとつぴな話を聞かされていささか驚いた。そして思わず不用意にも、これに即答した。

「それは出来ませんなあ……。いかに前山さんだつてまた誰だつて、それは出来ません。今は、そんなものを作れる人がありませんから……。ときにあるいは様子だけが志野みたいな……。黄瀬戸みたいなものが出来ないともかぎりませんでしょうが、ともかく、生命力は皆無なものに違いありませんから、一見似ているにしても実際の価値上、なんの美術価値もないものにきまつております。従つて問題になるものではありません。私は前山さんを評するわけではありませんが、もし直評を許されるならば、前山さんの今の製陶認識では失礼ながら古いにしえを偲ぶに足る、それは決して出来るものではありませんでしょう」

鈍翁は呵々大笑して……。

「そりやそうだろうね、そうたやすくは出来るもんじゃなからうね。時代が許さないだろうし、君の言のごとく作者がないだろう。しかし前山は大変な天狗てんぐで何、そのうち志野を焼いて持つてくるというんだからおもしろいじゃないか」

と、大笑いされた。まったく前山という人、ことを一途に単純に考えられる人らしい。

しかし、この時の前山さんの自負する胸中を知るものは、もしかすると私一人かも知れなかった。当時翁は志野の本場大萱おおがやから、その昔、志野に用いたかもしれぬと思われる陶土を手にしていられたことである。この陶土の入手に翁がいかに苦心を払われたかにはなかなかおもしろいニュースがとんだ。それは私が志野

の古窯跡を星岡窯の荒川研究生によつて発見し、ついでにその山まあい間から陶土はもちろん、その他顔料土の材料を探查し、ようやくにしてその陶土を発見して鎌倉の星岡窯に持ち帰つた直後のこと、時々星岡窯に來話する翁が雇傭の瀬戸工人某なる者、私の窯場にて瀬戸系研究に耽るAなるものと談話中、志野原土の大萱に発見されたること、星岡窯に持ち帰つたること等が話題となつて明瞭し、某工人はこれを翁に忠告したものと解される節があつて……。これからがまずいことに、端的な翁の性癖として、この佳報を特種扱いし、まっしぐらに土、土、土と志野陶土の入手に苦心され、ついに入手されるまでになつた。村人の言によれば社員ふう特派使節がわざわざ美濃くぐり久々利村に足を運ばれること三度、

某工人はもとより、瀬戸のT氏を煩わづらわすなどずいぶん大がかりの努力であつた。これは今でも村の話柄としておもしろく誇張されて遺つてゐる。

翁は最初志野陶土発見を某工人の口から知つたとき、矢も楯もたまらなくただ陶土さえ入手せば即刻にも志野は焼成するものと早合点し、急遽きゆうきよ使者を山間に走らせられたのである。ところが純朴な村人の節義は存外堅いものがあつて、星岡窯のAの発見と出資によつて掘り下げていった洞窟どうくつの陶土、……それは容易に翁の使者の命ずるまま乞こうままには諾するところがなかつたらしい。翁は焦慮して幾度か山中に使者を派し、村の役場員を動かし村益をもつて交渉に当たらせ、ついに〇〇〇出資を収めて希望

の陶土を入手したという汗だく事件があつた。

しかも、これが星岡窯のAにも私らにも積極的に行きがかり上、極秘中に策を練つて志野、黄瀬戸を作り上げ、某々に目に物見せてくれんとする翁の稚氣に外ならなかつたのである。

しかしながら芸術の成功は是が非でも主観の信念からなる實際行為であらねばならぬに反し、翁はそもそもの最初から、その製陶態度がぜんぜん客観的であつた。「指導で他人に拵えさす」これが第一客観である。「志野陶土があれば志野が再現するかに考える」これが客観である。これらは実に翁の目的をいかにしても成就せしめないゆえんであつて、私らから打ち眺めるとき、ただ

ただはがゆきを感じざるを得ないのである。ただし前山翁一人がその例でないことを追言する。

(五)

素人たるもの、ふとした趣味の軽はずみから、妙に矢も楯もたまらなくなり、資材に任せて無我夢中に築窯し、作陶の成果を空しくいたずらに楽しみ、自己に成就の用意があるなしを省みるいとまもなく窯に火を入れるなどは、有知のなすべきでないことわりを前四回にわたって僭越とは知りながらいささか説くところであつたつもりである。

しかし、その引例が主として前山久吉翁の現業窯におよんだことは、現在、窯に火を入れている唯一の人として止むを得ざる次第であつたが、それにしてもはなはだ御迷惑をかけた点は重々お断りする。

そうはいつでもずいぶんクドかつたじやないかとの誹りはあるだろう。だがそれは小生が毎度のこと魯山人はアクが強いといわれる点で、これまた今分のところ止むを得ない次第である。

さだめし読者も前山翁も分つた分つた、もう分つた分つた、もう分つたよう……を繰り返されていたことだろう。

魯山人のいうところ、要するに好きで窯を造る以上、自分ですべてをやること、自作することによつて意義があるというのだら

う。分った。

自家窯といえども雇傭の工人に作らしたのではお庭焼を出でないというのだね。つまり芸術にならないインチキ芸術だというのだ。分った。

それから自作にかかるまでには鑑賞が達していなければならぬ。書が出来、画が非凡にまで進んでいなくちやいかんというんだろ。分った。それだから伊達^{だて}じゃいけない、真から底からのまこと心からの仕事でなくちや駄目だというんだろ、分った。

しかも天才的な神技が入用だというんだね。分った。……

土で出来るんじゃない、釉で出来るんじゃない、学校程度の窯業知識で出来るんじゃない、絵描き程度の画では絵付けがものを

いわない。

現在の図案家程度では図案にならない、帝展の工芸じやしようがないというんだろ。分った分った……。

しかしそうなる作陶資格ある者は満天下魯山人一人ということになるじゃないか、おい……冗談じゃないぜ。てな程度にまでも製陶認識を進めて貰いたいというのが私の希^{ねが}いである。

必ずしも素人、窯を築くなど一概的にいうのではない。

青空文庫情報

底本：「魯山人の美食手帖」グルメ文庫、角川春樹事務所

2008（平成20）年4月18日第1刷発行

底本の親本：「魯山人著作集」五月書房

1993（平成5）年発行

初出：「星岡」

1934（昭和9）年

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年12月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

素人製陶本窯を築くべからず

——製陶上についてかつて前山久吉さんを激怒せしめた私のあやまち——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 北大路魯山人

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

Bilibili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>